

る。しかしハワイで *Galenga grass* と呼んで芝生用にうえられているものも彼等は *D. micrantha* に入れている。

ダイコンドラとアオイゴケは非常に近縁なものであるが、同時に両者は全く同じではない。もしダイコンドラの方が *D. micrantha* の基準形に近いものであるならば、アジア産のアオイゴケはその変種ぐらゐに扱ってもよいように思えるが、資料が十分でないので結論は差し控えておくことにする。
(東京大学理学部植物学教室)

○北岳の遺存植物 (植松春雄) Haruo UEMATU: On relic plants of Mt. Kitadake

北岳が現在の日本における最も注目すべき遺存的要素の宝庫であることは何人も認めることであろう。この原因は北岳の地質が秩父古生層であることから判明するように、この山の生成年代が古く、第 3 紀や第 4 紀時代に発生起源をもつか、もしくはその頃の分布を拡大したのも十分に遺存し得る歴史をもつし、日本列島上で富士山についての 3192 m という高海拔をもつということも北方系要素の遺存には極めて好都合の条件であったと考えられる。なおここでいう遺存種と称するのは前記した第 3 紀もしくは第 4 紀に主として北方から南下して遺存したもののなかで、現在その分布が高山頂とか特定の低海拔の場所に相当の不連続を示しつつ分布しているものに限定したい。

ところで遺存種のうち代表的な北岳周辺の固有種としてはキタダケヨモギ、キタダケトラノオ、サンプリンドウ、キタダケナズナ、キタダケカニツリ、キタダケイチゴツナギ、キタダケデンダなどがあげられ中でもキタダケソウは北海道、朝鮮、樺太にその類縁のものがあり、本州には北岳山頂付近の極めて限定された地区をのぞいては全く分布していないのである。これらのものは過去に広く日本列島上にひろがっていたものが、かろうじて北岳山頂付近にだけ遺存しているもので古い起源をもつものと考えられる。北岳を中心とした地域で分化しているものに *Melandryum* 属がある。西山温泉付近の岩壁や少々とんで秩父の金峯山麓方面にまで分布するピランジ、北岳下野呂川や鳳凰山麓小武川等の河原や岩場に目立つオオピランジ、鳳凰山地蔵岳山頂付近に多いタカネピランジ、北岳の吊尾根付近に目立つシロバナタカネピランジというようにいろいろの形のものが多い。この仲間では他地域に分布するものとしては北海道にカムイピランジがあるだけで、そのきわだった分化は注目に値する。

北岳の遺存種の宝庫は冬季における北西の季節風の影響からか、主として稜線の東側にその群落が発達していて、湿性の御花畑をつくる北アルプスの山岳とは異り、どちらかというとな乾性の御花畑をつくっている場合が多く、ハクサンオオバコ、ウルップソウ、イワイチョウ、コマクサなどの見当たらないのも興味深い。南アルプスの北に位置する八ヶ岳は北アルプスの湿性遺存種と南アルプスの乾性のものとの漸移地帯だとも言え、ウルップソウやコマクサもここでは目立っている。

割合に広い分布をしている遺存種を記してみるとイワインチン、タカネヤハズハハコ、タカネヨモギ、オオヒョウタンボク、チシマヒョウタンボク、タカネシオガマ、ミヤマハナシノブ、シロウマリンドウ、ヒメセンブリ、ヒメリンドウ、キバナシャクナゲ、シロウマオウギ、ウラジロキンバイ、タテヤマキンバイ、チョウノスケソウ、ムカゴユキノシタ、シロウマナズナ、タカネマンテマ、ジンヨウスイバ、レンゲイワヤナギ、キバナアツモリ、ニョホウチドリ、シロウマチドリ、タカネサギソウ、ヒメマイズルソウ、クロボスゲ、タカネナルコスゲ、タカネコウボウ、ヒイラギシダ、ヤツガタケシノブ、ミヤマハナワラビ、タカネシダなど非常にたくさん数になり記録しきれない程である。なおハクサンイチゲの一品が新しく見出されたので、ミドリハクサンイチゲとして発表しておいた(植研 38: 124. 1963)。普通品に混って小さな群落をつくっているが、今のところ北岳にしか見当たらない。(山梨大学学芸学部付属中学校)

○ *Thysanolaena* (イネ科) の染色体について (館岡 亜緒) Tuguo TATEOKA: Chromosomes of *Thysanolaena maxima* O. Ktze. (Gramineae)

Thysanolaena 属は唯1種 *T. maxima* O. Ktze. を含み、東南アジアからインドにかけて分布するものである。Hubbard (1934) は、その外部形態の特異さのために、独立の族 *Thysanolaeneae* をたてたが、トダシバ族に入れられたり (Bentham, 1881; Hackel, 1887), ダンチク族に含められたり (Stapf, Hubbard 1934 による; Keng et al., 1957), あるいはキビ族に入れられたこともある (Gamus and Gamus, 1922)。ダンチクのような稈と葉をもつ大形の草で、小穂は非常に小さく、その小穂構造や穎の特徴でも非常に特色のあるものである(図1および Hubbard 1934 参照)。

筆者は本年2月にフィリピンのレイテ島の Ormoc 市郊外で本種を採集したが、この種の染色体はなお未調査であったので、現地地根端を固定した。帰国後、パラフィン法で切片をつくり、クリスタルバイオレットで染色して、その染色体を観察した。その結果、本種が $2n=24$ の小さな染色体をもつことが判明した(図2)。基本数は12(または6)と考えられる。

筆者は1956年に葉の解剖学的特徴から *Thysanolaena* の類縁関係を論じ、おそらくダンチク族に近いものであるとのべたが、その後、この見解に反する事実は見出されていない。ここに明らかにされた *Thysanolaena* の染色体の特徴からもそれは裏付けら



図1. *Thysanolaena maxima* O. Ktze. レイテ島 Ormoc 市郊外の集団。